

漢字と言葉の おもしろい 研究所

毎回、漢字や言葉の面白さを
さまざまな側面から
紹介していきます。
意外な事実が見えるかも!?

第2回

今回の研究

ものの数え方から 分かること



中央大学
飯田 朝子 教授

(いいだ あさこ)
1969年東京都生まれ。東京女子大
学、慶應義塾大学大学院を経て、
1999年東京大学人文社会系研究科
言語学専門分野博士課程修了。博士
(文学)取得。2009年より現職。
主に、日本語の助数詞の意味と用法
について研究している。著作に「数
え方の辞典」(小学館)、「数え方
みがく日本語」(筑摩書房)などが
ある。

助数詞はもの の捉え方を 映し出す鏡



※本来、親が1回の産卵で生む卵のひとまとまりを「ひと腹」と言います。そのため筋子ひと腹は、卵のまとまり2本を指します。

ものを数えるときに使う言葉のこ
とを「助数詞」と言いますが、私た
ち日本人は、たくさん助数詞を細
かく使い分けてきました。例えば、
勉強机の上を思い浮かべてみてくだ
さい。教科書やノートは「冊」、え
んぴつは「本」、下敷きは「枚」、ペ
ンケースや消しゴムは「個」——と
いう具合に数えます。数え方の研究
者である飯田教授の著書『数え方の
辞典』には、約500もの助数詞が
紹介されているほどです。日本語の
豊かな「数え方の文化」について、
飯田教授は次のように語っています。
「日本語における助数詞は、その
人が数える対象をどのように捉えて
いるかを映し出す鏡のような役割を
果たしてきました。分かりやすいの
は鬼の数え方です。おとし話の鬼は、
暴れて人間を困らせる場面では「1

匹」と数えられ、心を入れ替えて人
間的な性格を持つと「一人」と数え
られるようになります。人間にとつ
て、より友好的な存在ほど「人(一
人、二人、にん)」で数える傾向が
あるのです。これは天使と悪魔の数
え方でも同様で、天使は「一人」と
数えるのに対し、悪魔は「一匹」と
数えるのが一般的です」

同じものでも状態や形状、使われ
方が変わると数え方も変わることが
よくあります。特にたくさん助数
詞を持つのは魚です。海や川を泳い
でいる状態では「一匹」ですが、水
揚げされて取り引きされるようにな
ると「一本」、鮮魚店に並ぶと「一尾」
と数えます。その他にヒラメやカレ
イなどの平面的な魚を「一枚」と数
えたり、切り身になるとサイズに
よって「一丁」「ひとさく」「ひと切
れ」と数えたりもします。飯田教授
は、同じものでも助数詞が変わること
で、そのものの印象が変わること
も指摘します。

「八百屋ではサクランボやスイカ
を「一個」ではなく、前者を「ひと
粒」、後者を「ひと玉」と数える
ことがあります。また、お弁当を「ひと
折」と数えることもあります。こ
れは数え方を変えることで高級感を
出しているのです。さらに、テレビ
は一般的に「一台」と数えますが、
最近では薄さを強調するために、あ
えて「一枚」と数えることも増えて
きました」

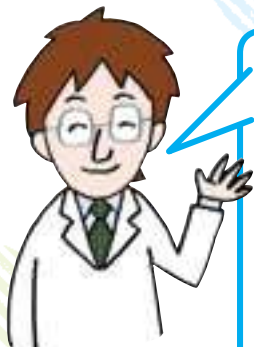
同じものでも数え方が 変わることがある

このように、助数詞は言葉の表現
の豊かさの一端を担ってきました。
最近では、汎用的に使える「ひとつ」
「一個」を何にでも当てはめて済ま
せてしまう傾向があるようですが、
暮らしの中の助数詞を意識して集め
たり、なぜそういう数え方をするの
かを調べたりすると、日本語と漢字
の奥深さを再発見できるかもしれま
せん。

漢字と言葉のマメ知識

「1回」と「1度」はどう違う?

「回」も「度」も行為や出来事を数える助数詞ですが、その使
い方には少し違いがあります。定期的に行われる行為や催し
を数える際に「回」を使うのです。つまり、「第3回〇〇大会」
とは言いますが、「第3度〇〇大会」とは言いません。その一
方で、再び繰り返されることが予測・期待されにくい行為や
催しには「度」を使います。例えば、「仏の顔も三度まで」と
いう言い方がありますが、「仏の顔は三回まで」とは言いません。
「回」を使うと、次があることを期待させてしまうのです。



イラスト/野田節美